

埼玉医科大学附属総合医療センター看護専門学校 令和4年度学校関係者評価につきまして下記のとおり評価結果をご報告いたします。

記

1. 委員
総合医療センター事務部部长 津久井一浩（委員長）
社会福祉法人埼玉医大福社会理事長補佐 手嶋顕久
総合医療センター看護部看護部長 池田光子
総合医療センター看護専門学校同窓会会長 佐伯文寿
2. 開催状況
 - 1) 会議名 : 第5回 学校関係者評価委員会
 - 2) 開催日時 : 令和6年1月16日（火）15:00～16:40（1時間40分）
 - 3) 開催場所 : 本校 1階会議室
 - 4) 出席者 : ①委員（4名）
総合医療センター事務部部长 津久井一浩（委員長）
社会福祉法人埼玉医大福社会理事長補佐 手嶋顕久
総合医療センター看護部看護部長 池田光子
総合医療センター看護専門学校同窓会会長 佐伯文寿
②学校（4名）
副校長 中村美智子
校長補佐 小崎妙子
教務主任 小林和子
事務室長 田中律子（司会）
書記（1名） 参加者合計 9名
3. 議題等
 - 1) 校長挨拶（校長欠席のため代理：副校長挨拶）
 - 2) 評価委員紹介（事務室長）
 - 3) 令和4年度自己点検・自己評価結果説明（説明者：副校長、校長補佐、事務室長）
学校自己点検・自己評価結果、事業計画、学生との意見交換会についての説明。
 - 4) 意見交換
自己点検・自己評価結果について、意見交換を行った。（詳細は別紙）
 - 5) 今後の予定
5月の理事会にて委員会報告

【大項目毎の自己評価の要約と詳細】

(1) 教育理念・目標 3.7

新カリキュラムの教育理念・目的を見直し、卒業時の到達目標も目的に沿った内容にした。これまでの98単位で3030時間から103単位で3060時間とした。具体的には、アクティブラーニングを取り入れた授業の工夫として、グループでの演習（解剖生理学演習・地域体験・臨床薬理学演習・リフレッシュ演習など）を増やし、各領域での周手術期とエンドオブライフは、領域横断として教授することにした。

(2) 学校運営 3.7

卒業生像は明らかになっており、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーについては、前年度に明文化した。ディプロマポリシーの中のグローバルな視点とキャリア形成については検討が必要である。学校運営に関しては、学則に沿って教員会議で検討し、校長報告後決定しているので適正であると考えている。定期的に行う面接での学生情報は、面接用紙と学生カードで保管し共有している。

(3) 教育活動 3.6

育てたい学生像を達成するために、新カリキュラムの科目ごとにシラバスの見直しを行い「各科目を受講することで、学生のどの能力が培われるのか」を明確に記載した。学生による講義の評価は各専任教員で行い、実習については全体にアンケートを行った。今後、全科目のグーグルによるアンケートでの授業評価を考えている。

学年代表者との意見交換は行っており、毎年出される「解答用紙の返却と模範解答の照合」は令和5年度に改善するために検討中である。

(4) 学修成果 3.3

国家試験の新卒の合格率は97.5%であり、全国平均より高水準である。国家試験対策は毎年見直し、1年次から学生の意識改革、普段の学習への取り組みの支援を行っている。また、新カリキュラムの基礎実習Iは5月に実施した。入学したばかりだがコメディカルの活動や病棟での看護を見学し予想以上によく学んでいた。学習の成果物は、ロビーに展示し共有している。

(5) 学生支援 3.8

就職については附属病院の就職支援を実施し、卒業生の94.1%が関連病院に就職した。病院見学の代わりに埼玉医科大学関連病院の動画を紹介している。希望者のほとんどが就職できることは強みである。

退学者は全学年の3.8%の9名で、前年度と同数である。学年別に見ると1年生8.0%の7名、2年生1名で1.4%、3年生1名で1.3%であり、これまで2年生が多かったのに対し、

1年生が増えている。休学者4名のうち全員が復学している。

就学資金については、法人からの月額3万円の奨学金制度がある。日本学生支援機構よりの貸付、ローン会社と提携した学資ローンが組めるように整えている。令和元年度より高等教育の無償化制度の指定校となっており、R3年度と同様18名が利用者している。

健康管理面では、保健管理に関する医師を配置しており、年1回健康診査、身体測定、ワクチン接種（B型肝炎、インフルエンザ、コロナ）を実施している。感染対策を徹底しているが令和4年度の感染者は64名で、7・8月が35名と多かった。月に4回程度学生相談室を設けて支援を行っているが、利用者は13名と前年度より減っている。

(6) 教育環境 4.0

施設については、築20年を経過しているため、点検が必要であると考え。設備については、3階の基礎実習室の給湯は長年問題があったが、改修工事を行った。

また、最新のシミュレーターはほとんど備えており有効に活用できているが、メンテナンスが必要な備品が増えてきている。

(7) 学生の受入募集 3.3

R4年度の入学者数は、80人定員に対し75名で充足率93.8%であった。高等学校等の説明会や業者主催の進路説明会は高校からの要望が多く、可能な限り参加しオープンキャンパスに誘っている。また、学校主催のオープンキャンパスは年6回と前年と同じだが、参加者は前年が137名であったが、228名と増加した。現役の卒業看護師の経験談も取り入れ、入学動機・学生生活・現在の看護活動について実体験からの話しがあり大変好評である。

(8) 財務 3.5

財務に関しては、経理で適切に執行管理している。予算計画どおりに遂行しているが、今後は、財務担当部署と連携し、収支の状態を把握していく必要がある。

(9) 法令等の遵守 4.0

平成26年度から教育活動の内容全般の成果を年報でとりまとめ、関連施設、県内看護学校に送付して公開している。令和2年2月に第1回学校関係者評価委員会を開催してから、現在まで継続し4回目になる。結果は、ホームページに公表している。

(10) 社会貢献・地域貢献 2.5

コロナ禍の影響で、今年度も埼玉県や川越市の活動が中止となり、社会や地域への貢献ができなかった。総合医療センター看護部の教育研修の場所としては随時場所を提供している。しかし、新カリキュラムの骨子のひとつである「地域の方々との具体的な交流」はほとんどなかった。1年次の3月に地域体験として「川越の歴史や生活」を考えるフルドワークを行った。

【令和4年度総括】

令和3年度の反省をもとに、前年度と比べ、今年度評価は10項目中5項目で評価が上昇し、5項目が同じ結果となった。

新カリキュラムの教育理念・目的を見直し、卒業時の到達目標も目的に沿った内容にした。103単位で3060時間とした。具体的には、アクティブラーニングを取り入れた授業の工夫をした。卒業生像は明らかになっており、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーについては、前年度に明文化したが、ディプロマポリシーの中のグローバルな視点とキャリア形成については検討が必要である。学校運営に関しては、学則に沿って教員会議で検討し、校長報告後決定しているので適正であると考えている。

国家試験の新卒の合格率は97.5%であり、全国平均より高水準である。国家試験対策は毎年見直し、1年次から学生の意識改革、普段の学習への取り組みの支援を行っている。また、新カリキュラムの基礎実習Ⅰは5月に実施し有効であった。

就職については附属病院の就職支援を実施し、卒業生の94.1%が関連病院に就職した。退学者は全学年の3.8%の9名で、前年度と同数である。学年別に見ると1年生7名で8.0%、2年生1名で1.4%、3年生1名で1.3%であり、これまで2年生が多かったのに対し、1年生が増えている。休学者4名のうち全員が復学している。

就学資金については、法人からの月額3万円の奨学金制度や日本学生支援機構の貸付、高等教育の無償化制度の指定校となっており、R3年度と同様18名が利用者している。

健康管理面では、保健管理に関する医師を配置しており、年1回健康診査を実施している。

感染対策を徹底しているが、前年度の15名に対し令和4年度の感染者は64名で、7・8月が35名と多かった。また、月に4回程度学生相談室を設けて支援を行っているが、利用者は13名と前年度より減っている。

財務と法令の遵守については前年度と同じである。実際の財務は学校法人である埼玉医科大学が管理しているので適切と判断した。

社会貢献・地域貢献の項目については、評価は低くなっている。しかし、新カリキュラムで求めている「地域で生活する人々を理解する」ことでは、3月に地域体験として「川越の歴史や生活」を考えるフールドワークを行った。

第3回学校関係者評価での意見として、「18歳人口の減少と大学全入学時代となり、看護専門学校として受験生の確保対策の強化を図る必要がある」との意見があったが、受験者の減少は続いている。優秀な学生確保のための特待生制度や男子寮の設置など検討中であるが進展はない。

特記事項としては、ハラスメントガイドの作成が埼玉県より求められており作成した。令和5年度より運用予定である。前年度と同様に教員に対するクレームがあり対応に苦慮した。「教員の言動が不適切であり、学習意欲が低下した」という内容であるが、学習が困難な学生への指導場面のことが多く教員も指導方法に悩んでいた。

<学校関係者評価委員会での意見交換>

1. 学生の受入募集について

・4年生大学と専門学校の差異はあるが、専門学校でも学生のニーズを捉えて成功している学校もある。例えば、関連の大学と連携して大学に編入できたり、年内入試に重きを置き早期に学生を確保したり、OB 枠があり入学試験や金銭面を優遇したりと工夫して学生を集めている。当校も1校だけでできることには限りがあるので、オール埼玉医大として考えていったら良いのではないかな。

・看護師確保が難しい。地方からの就職者、入学生が減っている。地方へのリクルートは検討してはいるが、コロナ禍後中断中である。

地方で大学を卒業しても、大学病院に就職できない事例もあるようなので、まだまだ開拓の余地があるのではないかな。ただ、看護協会自体が4大卒化を進めており、都内は大卒優先採用傾向にある。

・定員を確保するため、今までであれば不合格レベルの学生も入学させざるを得ない。そうすると、全体の学校生活にも支障が出ることもある。

・定員を削減するよりも、学生の分母を増やすため地方も視野に入れ、方策を検討してはどうか。

・金銭的に進学が難しい学生も、全国的に見ればまだいると思う。何らかの経済的支援を持って学生募集を埼玉医科大学学校群全体で考えられたら良い。看護師確保の意味からも専門学校が生き延びる方策を考えたほうが良い。専門学校の魅力とは何かを考える必要がある。奨学金も一律でなく多様なタイプを考え、勤続年数の増加に繋げてはどうか。

卒業後の就職を考えて医療系を選ぶ学生は増えている。一般大学に急遽看護学科が作られることが増えているが、そのような学校はコロナ禍で実習ができなかった。当校はコロナ禍でも実習を行っていたので、そこをアピールポイントとして学校説明会等でも話している。

2. 社会貢献・地域貢献について

・総合医療センターで参加・協賛している行事（リレイフォーライフ等）があるので、医療センターより情報を得て、学生にボランティアとして参加させるのはどうか。

3. 学生支援について

・校内の設備を修繕したり、電子教科書を取り入れたり、学習環境は整ってきているが、学生の能力は伴ってこない。当校が学習面、生活面で厳しいこともあり、ついていけないと思ってしまう学生も出てしまう。